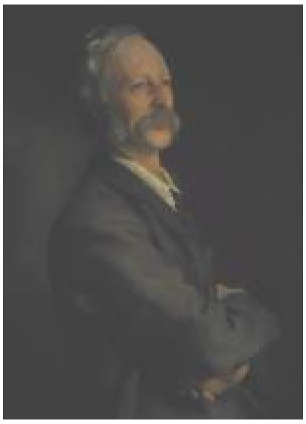
LOCH, Sir Charles Stewart (1849-1923)



[illegible]

[illegible]([illegible])[illegible](1869[illegible])[illegible]1870[illegible]1873[illegible]A.L.[illegible]1873[illegible]

[illegible]

[illegible]
1875[illegible]1869[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]1913[illegible]1918[illegible]

http://www.ps.ritsumei.ac.jp/shige3/dok/doku.php?id=study:bio:loch study:bio:loch Last update: 2010/08/23 21:20

渡米

1896年、ロッホはアメリカへ渡り、3ヶ月間をそこで過ごした。この間、ロンドン慈善組織協会と性格がひじょうによく似た「チャリティ連合 (Associated Charity)」を訪問した。アメリカにおける慈善活動との接触は、生涯続けられることになる。また、ロッホはいくつかの王立調査会でも委員として積極的な役割を果たした。1893年から1895年の老齢貧困者問題調査会、1904年から1908年の精神薄弱者問題調査会、1906年から1909年までは救貧法問題調査会の委員をつとめた。救貧法問題調査会の多数派答申にロッホの署名があるが、彼はこの答申のかなりの部分を執筆した。多数派答申の提案は当初は注目されなかったが、1929年の地方行政法(Local Government Act)や1930年の救貧法にその影響をみることができる。

政治的ポジション

政治的にはリベラルな立場をとっていたロッホは、1906年から1914年の自由党政権による社会立法にはほとんど共感をもっていなかった。ロッホはこれらの政策について、責任の観念を個人や家族から剥奪し、官僚制や国家財政に責任を引き受けさせるものだとして、これを厳しく批判した。彼は社会活動家としてはもちろん思想家および教育者としても高く評価された。彼は1904年から1908年まで、キングズ・カレッジ(ロンドン)のトゥック経済科学および統計学教授をつとめ、1905年にはオックスフォード大学から名誉法学博士の称号を得ている。

晩年と著作

1914年10月、ロッホは病気を理由に慈善組織協会の幹事職を引退した。在任期間は実に39年に及んだ。協会はロッホに年金給付を申し出たが、彼はこれを断った。1915年、ナイトに叙せられ、1923年1月23日に息を引き取った。

ロッホは強靭な知性と人格の持ち主でありながら、性格は柔和で他の人々の意見によく耳を傾け、かつ寛容であった。オックスフォード時代、彼はラスキンの下で学んだことがある。その影響からか、彼は生涯に渡って絵画に強い関心をもち続けた。彼は哲学的急進派であり、ジョン・ステュアート・ミルの学徒であった。そして、ヴィクトリア時代の偉大なフィランスロピ活動を実践面でも理論面でも代表する人物であったといえる。

ロッホの主要著作にHow to help Cases of Dstress(1883)、Charity and Social Life(1910)がある。後者は『エンサイクロペディア・ブリタニカ』(第10版、1902年)に執筆した”Charity and Charities”を敷衍させたものである。また、彼の論文のいくつかを収めたA Great Ideal and its Championが1923年にサー・アーサー・クレイの編集によって出版された。ロッホは詩集Things Within(1922)も出版している。

ロッホは1876年にソフィア・エマ(1934年に死去)と結婚した。エマはインド官僚の娘である。エマとの間に一男一女をもうけた。

- *DNB*
- St.George-in-the East Church

From:
http://www.ps.ritsumei.ac.jp/shige3/dok/ - **Intellectual History Online**

Permanent link:
http://www.ps.ritsumei.ac.jp/shige3/dok/doku.php?id=study:bio:loch

Last update: **2010/08/23 21:20**

Printed on 2024/10/31 12:05 http://www.ps.ritsumei.ac.jp/shige3/dok/